

2020年横浜ナザレン教会聖霊降臨節第二十一主日礼拝
「義とされた者の恵み」ルカ福音書 18:9～14

【聖書】

ルカ福音書18:9 自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々に対しても、イエスは次のたとえを話された。10「二人の人が祈るために神殿に上った。一人はファリサイ派の人で、もう一人は徴税人だった。11ファリサイ派の人は立って、心の中でこのように祈った。『神様、わたしはほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないことを感謝します。12 わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています。』13ところが、徴税人は遠くに立って、目を天に上げようとせず、胸を打ちながら言った。『神様、罪人のわたしを憐れんでください。』14 言っておくが、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」



祈りをテーマとした「不正な裁判官とやもめ」、「ファリサイ人と徴税人」の二つの譬え話は三週目を迎えました。今日は「ファリサイ人と徴税人」の譬え話を見て行こうと思います。9節、主イエスはこの譬え話を「**自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々**」に対して話された、とあります。主はこれまで幾度なくファリサイ派の人々の傲慢を指摘して来られました。だから、この譬え話も、譬えに出て来る当のファリサイ派の人々に話したのではないかと考えてしまいがちです。しかし、ファリサイ派の人々の登場する話を譬え話として、本人たちに話す事を主は今までなさっていません。それでは譬え話でもなんでもない。主イエスほど巧みな物語の語り手がそのような事をするとは思えません。ですから、この譬え話は、主イエスに従ってエルサレムへと旅する人々に向かって語っておられるのかもしれませんが。イエス様の周りの人々の中にも、自分は神に従う正しい人間だけど、周りの人は違う…と、自分で自分の信仰に酔ってしまう、うぬぼれてしまう、そして他の仲間を見下すという人がいたのかもしれませんが。それは十分、考えられる事です。主イエスは、愛する弟子達に向かい、この譬え話をされているのではないかと思います。何故なら、この譬え話には、信仰とはいったいどういうものなのか？神さまから義とされる…とはどういう事なのか、その信仰のエッセンスが詰まっているからです。ご一緒に見ていきたいと思います。



譬えの中のファリサイ人はこのような具合です。「ファリサイ派の人は立って、心の中でこのように祈った。『神様、わたしはほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないことを感謝します。わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています。』」11節の「立って」というのは、ある英語聖書では、「離れて立って」と訳されています。また、カトリックのフランシスコ会が翻訳している聖書では、「胸を張って立って」とあります。「あの人とも違う、この人とも違う」と神の御前で、自分と他の人との違いを述べ立てるこの人は、他の人々とは遠く離れて、胸を張りふんぞり返っている、彼の心の姿勢がその立ち姿にも表れているようです。ファリサイ人は、普段から罪人達とは付き合わずに生活しています。ですから、今日、神殿に来る途中でも、町の人々を見ながら思っていたのでしょう。「私はそこの男のように奪い取っている者ではない、私は不正な事をしているあそこの男のようでもない、勿論、姦淫しているあの娼婦とは全く違う」。そして、神殿に入れば、「あそこであんなだれているみじめな徴税人とも違う。」と思った。祈る時にも心の姿勢が変わる事はなく、「神さま、私はあなたの御前に堂々と胸を張れるだけの事をしてきました。あんな奴らとは違います」と誇らしげに心の中で宣言したのだらうと思います。

確かに、このファリサイ人は、それだけの事はしていました。12節には「全収入の十分の一を献げる」とあります。直訳すれば、「手に入れたものの全ての十分の一を献げる」です。私達の月定献金のように、収入が30万あったとしたら、その十分の一の三万を献げる…というのとは、少し違います。例えば、彼が市場で小麦を買ったとします。律法によれば、本来、小麦を生産した農家が、神さまに収穫の十分の一を捧げる事が決められています。しかし、当時の多くの農家は貧しさの為に、収穫高の十分の一を収められない事も多かったようです。ですから、このファリサイ人は、農家が納めていない場合を考え、購入した金額の十分の一を神殿に献げる…というような事を、購入する物全てに行うのです。収入の十分の一をはるかに上回る額を献げている事となります。信仰熱心なファリサイ派の中でもなかなかできる事ではありません。また、ユダヤ人が断食しなくてはならない…と決められていたのは、年に一度の大贖罪日だけでした。週に二日間も断食するという事は、彼が非常に信仰熱心であった証でした。ある牧師が、このファリサイ人の事を「この人がもし教会にいたとしたら、牧師は安心して色々な事をこの人に委ねるだろう。教会への献げものも、集会への出席も、色々な奉仕も申し分なく、熱心に行う。祈りを頼めば、堂々とした立派な祈りをささげるだろう。牧師が何の心配もしない信徒だ。」おそらくその通りだと思います。このファリサイ人は、本当に、神さまの戒めを守る事に頑張っていたのだと思います。そう、頑張っていました。そして、

徐々に自分の力で信仰していると考えようになっていたのです。そして、「これだけの事をしたのですから、私を認めてくれるでしょう！」と神さまと取引しようとしています。

一方の徴税人はどうでしょうか。徴税人という仕事上、ローマ帝国の役人達、神を信じない外国人とも付き合ったでしょう。しかも、定められた税金に大幅に手数料を上乗せして取り立てていたのです。神を神とも思わないからこそ、そんなまねができます。彼こそ、神の御前に出る資格もないようなものでした。ファリサイ人が、「あの徴税人のようでもない事を感謝します」と祈ったような生活ぶりであったのだと思います。しかし、自分の罪深さは、誰よりもこの徴税人本人が分かっていました。彼には神の御前に、誇るようなものは何もありません。ただ、ただ、胸を打って自分の罪を悲しみ、憐みを乞うしかなかったのです。目を挙げる事もできなかった、そんな資格があるとは思えなかった、ただただ、神の憐みを願うしかありませんでした。



しかし、「義とされて家に帰ったのは、この徴税人であって、あのファリサイ派の人ではない」と主は語ります。これは、少しおかしいのです。確かにファリサイ人は傲慢な思いを内に秘めていました。しかし、人間から見て正しい行いをしているのはどちらかと言えば、あのファリサイ人の方でしょう。ですから、ここでイエスさまが仰る「義」とは、道徳的な「正義」というのとは、少し違うものだと分かります。聖書が「義」を語るとき、それはただ、私達が道徳的な意味で正義感があるとか、正しい事を行うというのを意味するだけではないのです。「義」とは、先ず、何よりも神とどのような関わりにあるかという事です。神と正しい関わりを持つ事ができるのを「義」と言います。つまり、「義とされる」とは、天の御神によって、義しい関係に招き入れられた…いう事なのです。天の御神は、ここで、徴税人の方が、神との関わりを正しく生きていると、認めてくださったのです。そして、神が、この徴税人と正しい関わりに立って下さるという事、それが、「徴税人は義とされた」という事です。つまり、義とされる…という事の中には、二つの側面があります。神が私達を正しく扱って下さる、私達を正しくもてなして下さる、それが神の義です。そして、私達が神を神として祈る、神を神として礼拝する、それが人間の義だと思います。

そして、ここでは、ファリサイ人と徴税人のふたりの「義」が、何よりも祈りにおいて問われていると言えます。道徳的行為における正義ではなくて、祈りにおける義が問われています。正しい祈りのあり方が問われているのです。祈りにおいて、神を神として祈っているかが問われる、つまり、信仰が問われているのです。

ここで、二十世紀最大の神学者カール・バルトの言葉を紹介したいと思います。大学の神学部を卒業した若き日のバルトは、スイスの田舎の小さな教会に牧師として十年ほど仕えていました。時は、20世紀初頭、今から100年ほど前、第一次世界大戦が勃発します。その際、バルトが尊敬していた当時の名だたる神学者達が、開戦を主張するドイツ政府に反対するどころか、こぞって賛成した事に大きな衝撃を覚えます。彼は、第一次世界大戦が終結した直後、「ローマ書講解」という書物を世に問います。人間中心の神学になっていた当時のキリスト教世界に対して、「人間ではなく、徹底的に神を中心として考え直さないとならないのではないか？人間の混乱と悲惨を見過ごしにしているのか？それではキリストを真剣に考えていないのではないか？だからキリスト教会は、戦争に協力してしまったのではないのか？」と鋭く問いかけたのです。この書物は、センセーションを巻き起こし、バルトは一躍名をあげます。その「ローマ書講解」でバルトは、次のように言っています。「信仰は空洞だ。私どもの信仰は空洞、中はからっぽ、何もない。それでいいのだ。問題は私達の信仰のたくましさ、強さではない。くずおれ、くずおれていく我々を支える神の恵みの力こそではないか。神の恵みの力でこそ私達は立つのである。神にこそ、キリストにこそ、私達の確かさの根拠があるのではないか。」本当にそうだと思います。神の御前では私達は、何も持って立つ事はできない。誇るものなど何もない。信仰さえも、また、神から与えられたものなのですから。私達の確かさの根拠は、神です。自分ではありません。

だから「祈る」事は、受け身な事だと思います。「自分が、自分が、」と私達の方から父なる御神に言い立てるのが、祈りではない。願いを申し上げるのと同じように、心を込めて、神さまからの応答に耳を澄ませる事、それが祈る事ではないかと思います。この徴税人は、「罪人の私を憐れんでください」と祈り叫びました。神の御前にくずおれ、祈ったのです。その時、彼は、「あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。もう罪を犯してはいけない。」という天の父なる御神の言葉を確かに心に受け取ったのだと思います。彼は義とされて自分の家に帰る事ができた、神との関係を正しくされて、生活の場に戻る事ができたのですから。空っぽの自分で神の御前に出て憐みを乞い願う、その時、神の応答をいただく、これは、義とされた者の恵みです。神の前に自分を誇っていると、胸を張って反り返っていると、神からの応答は聞こえません。義とされる恵みは、神の御前に、形だけではなく真実に遜って祈る者に与えられます。



しかし、だからと言って、私達は、この譬え話を聞いて次のように祈ってはいけない事は明らかです。「神さま、私はこのファリサイ派のような人でない事

に感謝します。彼のように私は傲慢ではありません、人を差別しません、彼のように自分の行いを誇りません。私は何も誇らない罪人としてあなたの前に立っています。」そう言って、他の人を断罪し、自分こそ、神と正しい関係を結ぶ者と自分を誇らしく思う、そして、このファリサイ人の罪を繰り返す、私達はそういう事をしてしまいます。ではどうしたらいいのでしょうか。

ある神学者が「隣人愛には、想像力が必要だ」と言っていたのを聞きました。その通りだなあ…と感心しました。やはり、目に見える所だけを見て、「あの人は罪深い、この人はだらしない、そこの人は傲慢だ」となどと判断するのではなくて、彼が彼女がそうせねばならなくなったその背景までも想像してみなくてはならない、それが「隣人愛に想像力が必要だ」という意味だと思っていました。しかし、今日の聖書テキストから色々と考えさせられて、それだけではないな、と思いました。先ほど、「義とされる」という事は、「神と私達の関係が正しく整えられる事、神を神として祈る事」と申し上げました。そうすれば整えられるのは、「神と私の関係」だけではありません。「私と周りの人との関係」も整えられる。なぜかと言えば、神さまとの関係が整えられると、「神さまは、この人、私の隣人をどうぞ覧になっているだろうか」と考える事ができるからだと思います。神は全ての人を愛し大切に思っておられる、一人ひとりを異なっておつくりになっている、そして愛してくださっている、私を愛してくださっているように、隣人も愛してくださっている、そう想像する事が大切なのだと気づかされました。神さまが、私と気の合わない、考え方も何もかも異なるあの人をどれくらい大切に思っておられるか？—ご自身の御子を十字架に架けてまで救おうとされた、それほどに、私がどうも受け入れがたい人を愛してくださっている、イエス様もその人を命を投げ出すほどに愛しておられる、その事こそ私達は想像しなくてはならないのだと思います。

そうしますと、ある方を思い出しました。「ちいろば先生」と呼ばれた榎本保郎牧師です。これは前にも説教で紹介した話です。榎本牧師が、どこかの地方の伝道集会に、三、四年続けて呼ばれて出かけていった時のこと。集会後に榎本先生を一人の信徒が訪ねてきました。そして、同じ教会の気の合わない仲間の悪口を散々愚痴って帰って行きました。先生は「教会には色々あるし、ガス抜きだって必要だ」と黙って聞いていたそうです。しかし、同じ人が二年、三年と続けて訪ねて来て、同じように仲間の悪口を言った。とうとう、榎本先生は次のように言ったそうです。「あなたは、主イエス・キリストの十字架をどう思っているのですか。あなたが散々悪くいう、その教会の仲間の為にも、主イエスは命を捨てて愛してくださったのですよ。主が命がけで愛した人の事をそのようにあしざまに言うだけとは、あなたは、主イエスの十字架を真剣に受け止めていないのですか」。次の年の伝道集会。同じ信徒がまた榎本先生を訪ねてきました。「先生のあの言葉で、私は目を開かれました。確かに、主イエス・キリストの事を私は忘れていました。」この信徒さんは、ちいろば先生の言

葉によって、気づかされた。十字架に苦しみ血を流す主イエスの十字架のもとで主などいないがのごとくに仲間を裁き糾弾している自分の姿を先生の言葉の中に見出した、そんな自分の罪深い姿に戦き、この徴税人のように祈った、神に憐みを乞い、悔い改める事ができたのでしょ。神さまとの関係を正されたのだと思います。そして、彼は彼女は、この時本当に、隣人を得たのです。イエスさまが十字架に命を投げ出す方と受け止める事ができた、イエス様の十字架のうちにその仲間を見出す事ができた、これもまた、義とされた者の恵みだと思います。



そして、神との関係がその都度正しくされれば、私達の祈りは変わっていきます。あのファリサイ人も、自分の傲慢さに気づかされ、悔い改めて神を神とし、神との関係が正しくされた時、彼の祈りはどのように変わっただろうか？と想像します。おそらく「神よ、あの不正を働いている者、奪い取る者、姦通を犯す者、どうかどうか、彼らを、彼女らを憐れんでください。どうかよろしく願います。」というふうに執り成しの祈りへと変わったのではないかと思います。そして、たとえを読んで、「あのファリサイ派のような傲慢な者でない事を感謝します」と祈った傲慢な心の私達も、神との関係が正しくされて祈りが変わります。「どうか、徴税人と同じ恵みをあの真面目で熱心なファリサイ人にもお与えください。人を愛するあなたの愛をお与えください。願います」と祈る者へと変えられます。隣人の為のとりなしの祈り、他者の為への祈りこそ、父なる神が最も喜ばれる祈りだと思います。とりなしの祈りによって得られる神の喜びこそ、義とされた者の恵みです。主イエスこそ、十字架の上でさえ父なる神に執り成しの祈りをされた方だからです。私達は、みな、主イエスにとりなされた者。主イエスに執成していただいてこそ、神さまを神さまとできるのです。だから、自分の義で執成すのではない、キリストに執成された者として、執成しの祈りを献げます。それが、主イエスに倣うという事だと思います。

私達、横浜ナザレン教会と、そこに連なる一人ひとりも、また、そのように、信仰の仲間のとりなしの祈りに応えてくださる主イエスによって支えられ、担われてきた者達です。いわば執り成しの祈りに担われ、支えられているとも言えます。私は神学生時代、夏休みの夏季派遣で、四十近い全国のナザレン教会を尋ねました。印象深い事に、どの地方にも、日本ナザレン教団の各教会の為に教会名簿にある名前を順番に辿りながら、熱心に祈りを献げる信徒さんがいました。それ迄会った事もない人が自分の為に神に祈ってくださっている、と知った時は、本当に感動しました。「こういう名もない方々の祈りに支えられてこそ、教会に奉仕できるのだ、神学校に入って自分の力だけで勉強

している気になっていた、自分で何もかも得たように思っていた、傲慢だったなあ」と気づかされた時でした。私達は執り成しの祈りに担われ、支えられている、それは牧師として教会に仕えるようになってから、なお強く実感するようになっています。この横浜ナザレン教会もそうです。この教会には病気の為に礼拝堂の礼拝に来れず、ネット中継も環境が整わずに視聴できない方が何人かおられます。しかし、その方々は、時折くださるお手紙やお葉書には必ず、「教会の為に祈っています」と書いてくださいます。他にも日本全国に住んでいる横浜ナザレン教会ゆかりの方々も「祈っています」とメールやお便りを下さることも多くあります。他にも私達が思ってもみない方々で祈ってくださっている方々がいます。そんな人々の執り成しの祈りに支えられて、今の横浜ナザレン教会と皆さんがあるのだと思います。キリストをより頼み義とされた者達の祈りにつながれて、教会はキリストの体として成長し続けるのだと思います。義とされた者達の祈りに応えて、主イエスが教会を支えてくださるからです。私達も、主イエスによって祈られた者として他の人々の為に心を込めて祈りたいと思います。執り成しの祈りを献げる時、神は豊かに私達に臨んでくださいます。そこにキリスト・イエスがおられるからです。